



Title	ナガサキを生きる
Author(s)	池田, 早苗
Citation	架橋, 13, pp.95-113; 2013
Issue Date	2013-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/33738
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-20T02:40:11Z

ナガサキを生きる (Living in Nagasaki)

池田 早苗 (Sanae Ikeda)

1. 被爆時の状況―妹の遺体を探しに
2. 死んでいくきょうだいを火葬する
3. 母の死―入院―被爆者農園
4. 質疑応答

「講話者のプロフィール」

最後は池田早苗さんのお話です。池田さんは一九三三年、長崎県大村市に生まれました。一九四〇年に現在の長崎市江里町に転居され、原爆投下の一九四五年には西浦上国民学校の高等科に進学されました。八月九日は爆心地から約二キロメートルの路上で被爆されました。ご兄弟が五人いらつしやいましたが、ご兄弟は爆心地から八〇メートルの自宅で被爆され、十日以内に全員がお亡くなりになりました。戦後二年ほどたち、お父さんが現在は白内障と呼ばれる原爆の後遺症で視力を失い、仕事を続けることができなくなって、池田さんは十四歳ころから働き始めました。一九四九年に定時制の長崎市立第一商業高校に入学され、四年間働きながら通います。一九五一年に県庁に就職され、六十歳の定年まで交通局にお勤めされました。戦後十年の間に、ご両親は原爆の後遺症に苦しみながら亡くなりました。そのころ結婚され、長男長女をもうけます。

池田さん自身は被爆の後遺症としてこれまで、食道がんや胃がんなどを患われました。一九八一年に被爆の証言を始められ、それ以降、約三十年間語り部活動を続けていらつしやいます。

講話

被爆時の状況―妹の遺体を探しに

池田 いま、ありましたように、十二歳のときに、アメリカが二回目の原爆を長崎に落としましたが、この原爆は、八月九日の朝は、長崎に飛んできていた飛行機じゃなかったんです。小倉に落として行っていましたB・29でした。このB・29は、小倉に落とすために朝、小倉に行っていました。雲がかかって標的が見えないので、第二の標的の長崎に向かって、有明海、島原半島のほうから入ってきたと思います。その時には、空襲警報のサイレンではなく、警戒警報のサイレンが鳴っておりました。警戒警報というのは、敵機が近くに来ておりますというサイレンです。そういうときには、みんな防空壕に入らなくていいんです。でもそのときに、B・29が長崎にはもう飛んできていました。わたしたちは、戦争が始まって四年間空爆を受けております。ですから、この飛行機の爆音は日本の飛行機なのか、アメリカの、爆弾をたくさん積んで雨のようにはらばらばら落としていく爆撃機B・29なのかというのにはわかっていましたから、アメリカの飛行機が来たのに、どうしてサイレンが鳴らないんだろうと思った人は空を見ませんでした。そこはもう、爆心地から二キロ離れたところですよ。いまでいいですよ、長崎北高がある方角です。住所の名前はむかしでいいですよ、西彼杵郡福田村小江原郷というところですよ。そのあたりに母と買い出しに行つて、たどり着いたころ、B・29が飛んできたので、空を見て、どうして空襲警報のサイレンが鳴らないんだろうかと思つて一生懸命に飛行機を探しておりました。薄い雲がかかって、ほとんどB・29の機体は見えません。そのときにすごい爆弾がわたしの目に突き刺さりました。その光、緑の濃い光です。その強い光を目に受けて、わたしは目が、もう、見えなくなりました。そのあとには、原爆の爆発した爆風が飛んでくるんですが、それも覚えておりません。

被爆後、わたしは記憶を失つて、気がついたときには木の根っこにしがみついていたがた震えていました。母は、わたしより十五メートルほど離れた草むらのほうに転がっておりまし。

わたしは二人は買い出しに行く途中だったんです。朝、母は買い出しに行く準備をしておりましたが、わたしは今日はずいぶんいいので連れて行ってくださいと頼みました。母がだめだと言います。どうしてだめかと聞きますと、もう何日もまともに食へていません。戦争が始まって四年、食べ物がありません。一番まずい食べ物、大豆の搾りかす。大豆を搾り取つて残った油のかすをわたしたちは配給でもらい、それにカボチャや大根といった野菜を入れて、そういうのしか食べられないんです。ですから、体がだんだん弱つて、大きな声も出せません。走り回ることもできません。学校の階段を上るときには、手すりを持っていました。みんな顔は青ざめて、元気な人はほとんどいませんでした。そういうことで、母が農家に軒ずつ回つて、なんでもいから野菜を分けてくださいというのが買い出しです。わたしはその買い出しにどうしてもついていきたくて、母より先に家を、裏口から出まして待つておりました。そのずいぶん離れた山道で母がのぼつてくるのを待つておりました。母は、ここまで来たなら仕方ないから連れて行くということになつて、歩き出しました。

しばらく歩きだしたときに、わたしの後ろのほうから、三人の若者が、「買い出しに行くんですしたら連れて行ってください。わたしたちは大橋工場に学徒動員で来てるんです。」そこがここなんです、この学校です。「今日は朝から、寮に食事がありませんでした。工場に働きに出る元気がないんです。買い出しに行くんですしたら、自分たちも連れて行ってください。」何か農家で分けてもらったのを自分たちで食べようと思われたんでしょうが、母は断りました。「一軒ずつ農家を歩き回つても、分けてもらえない食料がもうないんです」と母は断りました。そのときわたしが思い出したのは、その学生さんたちが来られたところは、西町といって、いまは拘留所になつておりますところなんです。そこに西郷寮といつて九州のほとんどの学校から、学徒動員でやつてこられている生徒さんたちの寮がありました。そこに

おられる人たちです。わたしは、たいへんひどい思いをしておられることは予測しておりましたので、「わたしについてきませんか。これぐらいの小さな梨がなるところがあるんです。畑と山の境で、自然になるんです。地雷といっておいしくはないんですが、もう食べられるかもしれませんから、ついてきませんか」と言つて、二三個ポケットに入れて、別れました。

そこはもうすでに爆心地から二キロ近くのところだったんです。そしてさっき言いましたように、すごい光が目につき刺さつて、わたしは目が見えなくなつて、大きな木の根っこにしがみついてがたがた震えていました。ずいぶん時間がたつて、母とそこから逃げ出していきます。そのあたりの景色が見えなくなりました。薄暗くなつたんです。原爆の煤が空いっぱい広がつて、太陽の光が遮られて、なんにもわからなくなりました。夕方のように薄暗くなりました。農家の人が連れてきていた牛の背中が原爆の熱線で燃え上がつて、牛が悲鳴を上げながら走り回つていました。わたしは見ました。なんだかいままでの爆弾とは違ふ、すごい爆弾が落ちてきたんだ。頭の上に落ちたんだ。何が起つたのかわかりません。急いでそこから逃げ出して、手熊といふところの農家にたどり着いてみますと、ガラスが割れました、たいへんな爆風が来ました、長崎の上空が燃えています、空が真っ赤になりました、たいへんなことが起つているに違いありません、と言われるんですが、なんにもわかりません。いままでの爆弾は、一つの爆弾が落ちますと、土の中にこの教室ぐらいの穴が開くんです。そしてそこにいた人はほとんど死んでいきます。少し離れたところ、向こうの教室ぐらいだったら助かるんですが、原爆はそうではありません。頭の上ですごい爆弾が爆発してみんなを殺してしまつたんです。急いで農家の人に食べ物を、大根、さつまいも、さといも、そういうものを分けていたいで急いで長崎のほうに帰つていきます。

そうしますと、原爆にあつた人間、黒焦げの人間にいました。真っ黒焦げのおじさんは顔が溶けてしまつて、ぶらぶらと顔の皮膚がぶらぶら下がつております。頭の毛も真っ黒焦げになつて、洋服もほとんど着ておりません。ぼろぼ

ろの煤けた洋服を着るんじゃないかと、ただ体に洋服がぶらさがっていると言ったほうが早いと思いました。靴も履いておりません。そのおじさんがはじめて原爆にあった人でした。そしてそのおじさんは近寄ってききましたが、声が出ないんです。母が水を入れた瓶を抱えていたんですが、その水をくださいと手で示すんです。母が瓶の水を飲ませますと、おじさんは声が出ました。「長崎の街は全滅した」と言われました。「おじさん、全滅してるとはどういうことなんですか？ アメリカの飛行機がたっさんの爆弾を落としましたんですか？」と聞いたんです。そうしたら、「そうではありません、一機か二機の飛行機が上のほうからすごい爆弾を爆破させて、みんなを真つ黒焦げにさせております。」そのおじさんは「全滅した」と言われました。「たっさんの人が這いながら逃げていますが、その人たちもみんな死んでいくに違いありません。たいへんなことが起こっております」ということだけを教えてください。急いで長崎のほうに向かって母と帰ってきますと、今度は少し元気な若い人たちが逃げてきていますが、ほとんどの人が洋服がぼろぼろ。さきほどのおじさんのようにひどいやけどはしておりませんが、ようやくそこまで逃げてきた人たちに会いました。

急いで、朝、わたしが母を待つていたところまで行きますと、そこは高射砲の陣地があります。いまでも円い跡があります。それは小さな高射砲で、撃つても届かないんですが、その朝も兵隊さんたちは、一生懸命にB・29を撃ち落とすんだと言って、弾を運んでおられました。それを撃つて、弾が飛んでいくのが見えるんですが、飛行機にたどり着く前に爆発してらんです。撃つても届かないんです。アメリカのB・29爆撃機は一万メートルくらいのところを悠々と行ったり来たりして、爆弾をたくさん落としていきます。この一万メートルくらいのところへ届かないのを、撃ち落とすんだと言って、兵隊さんたちはいつも戦争をしておられました。「あ、これが戦争か」とわたしは見ながら、弾が届かない戦争をしている、これではもう絶対に勝つことはないねえ、と友達同士でよく話しましたが、小さな声でこそそそ話しかできませんでした。その兵隊さんたちも、帰りにわたしが見たときには、もう一人もおら

れませんでした。真つ黒焦げになって死んでおられました。

その後、しばらく下っていきますと、横穴防空壕があります。わたしたちは空襲警報が発令され、サイレンが鳴りますと、防空壕に皆はいるんですが、その防空壕に入っておられたのは、下のほうから逃げてこられた森川という人です。その森川さんのお姉さんが泣いておられますので、母が様子を聞きますと、「弟をここまで連れてきました。ようやく山道を引きずるようになって連れてきたんです。大やけどです。家の柿の木に登ってセミを取っておいりました。家の外におりましたから全身真つ黒焦げで、たいへん痛い痛いと言つて、いまにも死にそうなうめき声をあげて泣いておられました。」母がわたしたちの家の様子を聞きますと、「一軒も家はありません。木造の家は全部めっちゃめに壊れて、一軒も残つておりません。全部、だめになつております。たくさんの方が死んでしまつております。生きている人はたぶんいないだろう」と言われました。それを聞いた母は、家に五人兄弟を置いてきましたので、もうみんな死んでいるに違いないと思つたようでした。もう歩くことができないので、家まで下つていつて、またここまで教えに来てくれないかと、わたしに一人で様子を見に行かせました。

ところが、だんだん家に近づくにつれ、山道が通れませんが、木が倒れ、それから家のトタン、柱いろいろなもの散らばつてゐるんです。山道が通れませんが、畑の真ん中を通つて、下つていきます。そこはもう家にずいぶん近寄つたところです。畑の広い真ん中を通つて下つていきますと、手招きをされます。そのおじさんは、背中を畑の上にあおむけになつて倒れこんで、手招きされるんです。「おじさん、どうしましたか」と近寄つていきますと、起こしてくださいと言われました。わたしは、おじさんの後ろに回つて、背中に手を入れました。おじさんの背中は、べつとり、もう溶けてしまつてゐるんです。起こしてあげましたら、わたしの両方の手のひらに、おじさんの背中の皮、血か肉かべとべとしたものがぶら下がりました。わたしは起こしてあげました。起こして座らせましたが、そのまま、苦しむ声を上げて座つたままでした。

わたしはどうすることもできませんので、急いでそこから離れ、家にたどり着きました。わたしたちが住んでる西町というところは、いまは江里町と名前が変わっておりますが、大橋のすぐ先に、JRの広場があつて、いまビルができておりありますが、その近くです。小さな川があります。きれいな水がいまでも流れておりますが、町の一番低いところに一メートルほどの溝川があります。その溝の中に、家がこなごなに崩れて燃え上がったり、たくさんのけがをしたり、大やけどをした人たちが、逃げ場がないのでずっと長い溝の中に入り込んで死んでおられます。その中に家の外にいたわたしの妹が真つ黒焦げになつて死んでいるに違いないと、姉ちゃんから聞いて、探しに行きました。背格好だけで、わたしは見るんです。これは妹じゃなからうかと思つて見ますが、全身真つ黒焦げです。頭の毛も、顔も、足も手も、すべてのものが真つ黒焦げです。背格好だけで、これが六歳の鈴子だろうと思つて見ますが、まったくわかりません。姉ちゃんに、どういう服を着ていましたかと聞いたら、母が小さな花模様の洋服をほどこいてつくりかえたのを着せてあげてるといふんです。ところがその洋服もわかりません。これが妹に違いないと思つてよく見ますと、パンツのゴム紐が十センチくらいのことっております。そのゴム紐をひっくり返してみますと、裏に二三個だけ、真つ赤な小さい花模様の生地が少しだけ残つておりました。それだけでこれが妹だとわかつたんです。真つ黒焦げの妹を抱いて帰つてきました。わたしは泣きながら帰つてきたんです。

わたしたちの頭の上に、すごい爆弾を落として爆発させて、たくさんの人を真つ黒焦げにして殺してしまつたのが、わたしは憎い、アメリカが憎いと言いなから、妹を抱いて、畳を二枚剥いで、家が燃えてきても危なくない、畑の真ん中の集めておくところに連れて帰つてきました。

死んでいくきようだいを火葬する

その夜はアメリカの飛行機が一晩中、低く飛んで写真を撮りに来ていました。照明弾を落として、低く飛んで、日本の兵隊さんも陣地もみんな壊されて、もう悠々と低く飛んで一晩中、写真を撮って行ったり来たりしていました。夜中にひもじくなつて、なにか拾つて食べようと思つたので、なすび畑に這いながら行きますと、そこには黒いものが点々と転がっているんです。それはみんな真つ黒焦げになつて死んでいる人たちです。その人たちを踏まないように、這いながらアメリカの飛行機が光を放つて写真を撮る明りで、なすびを拾つて食べました。べとべとしたなすびでした。それから、たくさんの人の苦しい悲鳴が聞こえてきます。一晩中聞こえてきました、あちらからもこちらからも。でも、この人たちの声も、夜が明けるにつれてだんだん声が小さくなつていくんです。あつちの人の声もこつちの人の声もだんだん弱くなつていつて、夜が明けるころには聞こえなくなつていつて、ほとんどの人が亡くなつてしまわれました。

わたしは一番仲のいいJ.R、国鉄の官舎の管理人として来ておられました人の家に夜が明けるのを待つてから行きます。その家は木造の家で、全部お亡くなりになつて、そして燃えておりました。燃え跡にはわたしの同級生と第二人、三人が抱き合つような格好で真つ黒焦げになつて死んでおられました。その友達に手を合わせてさよならさよならと、わたしは手を合せて泣きながら、そこからもう一人の友達のところへ歩き出しました。一三歩あるいていきますと、官舎をつくるための新しい小さな溝を飛び越えました。そのとき溝の中に丸いものが横たわつてゐるんです。これはなんだろうか、こんなに丸くて長いものが、と思つて横を見ますと、若い女の人のお腹が原爆で飛び出してるんです。腸が膨れ上がつて飛び出して、だんだん朝日が上がつて温度が上がつて、その腸が透き通つてなかの食べ物が見えてるのまで見えます。わたしは飛び越えてからその人に「ごめんさい。人間のお腹の中にこんなに長いもの

が入つてるとは知らずに飛び越えてしまいました」と、その人に手を合わせて、ごめんなさいといいました。それから十五メートルほど歩いていきますと、今度は、もう山下という友達の家が見えるはずなんですが、家はもうありません。こなこなに壊れてしまつて。そこに、地面に叩きつけられた五六歳の男の子が死んでるんです。この男の子、もう顔と頭と、体だけ転がつてるんです。土の上に頭が叩きつけられて、顔、頭が溶けてしまつてるんです。そして転がつて死んでおりました。わたしは山下という友達の家がすぐ近くにあるんですが、もう歩くのがつらくなりました。まだたくさんの方があちらこちらに死んでおられるのが見えるんです。

もう歩くのをやめました。そして、妹を運んだところに戻つて、父と二人でそれを国鉄の広場で火葬しました。そこにはたくさんの方の国鉄の官舎をつくるための材木が散らばつておりましたので、そこで火葬しました。次から次と、その広場に集まつて火葬する人たちが、一日中続きました。

二日目だつたと思いますが、救護列車が近くまで来ました。汽車の汽笛が聞こえました。汽車が汽笛を鳴らしたところに、弟を連れて行きました。四歳の三郎、一番小さい弟です。そうしますと、父もほかの兄弟を連れてきました。汽車が止まつたところにたどり着いてみますと、汽車は道の尾駅のほうから巣立つて、バックしてそしてわたしたちの住んでいる西町というところの一番近くの踏切で停まつておりました。そこは西郷バスというところなんです。ここに汽車が停まつておりましたので、わたしは汽車のなかをのぞいてみました。そこは西郷バスというところなんです。そこは米藁か麦藁か覚えませんが、たくさんの方を乗せるために貨物列車が来たんです。ところが、その前にも何回か汽車が来るので、そこに自分で這いながら来た人、自分で来た人、汽車に乗るまでもう死んでおられるんです。ですから踏切のところにも道がありますが、そのあたりにはたくさんの方の死体が転がつてるんです。あとでその汽車の運転手さんの手記を本で読みましたら、少し元気な人は乗せなかつた。もうこの人は汽車に乗せていっても、どこかの病院に着くまでに死んでしまうというようない人も乗せなかつたようです。ですから、たくさんの方が救

護列車に乗るためにそこに集まって、死んでおられました。ずいぶん年数がたつてから、ある弁護士さんから、「救護列車がたくさんの人を連れに来て、たくさんの人が亡くなったのはどこですか」と聞かれました。「ここです。この踏切です。もうここから長崎駅、浦上駅のほうには行けなかったんです」と言いました。「どうしてあなたは知ってるんです」と弁護士さんが言うんです。「じつは、弟をここまで連れてきましたら、乗せなかつたんです。汽車に乗るためにたくさんの方が死んでるから汽車に乗せなかつたんです。」その弁護士さんが調べに来ておられたのは、被爆認定のための、汽車に乗ったという証明がなくて困っている人がいるんです。わたしは弁護士さんに聞きました。汽車に乗る前に水を飲んだと聞いておりましたが、汽車道の手前で水を飲みに川へ降りたんですか、それとも、汽車を通り越して水を飲んでまた汽車に乗ったんですか、と聞きました。そしたら、その弁護士さんがわたしに、「どうしてあなたは、汽車が停まってたくさんの方が死んでおる様子を言ってるんですか」と聞いたから、「じつは、わたしは語り部をしながらずっといままで生きておりますから、こう言ってるんです。その人の認定をするための材料になるならよかったです」と言つて、そして、その人は原爆の認定を取られたそうです。だけど、すぐに亡くなったという連絡もありました。

そういうことで、その踏切にたくさんの方が死んで、山積みになっておりました。父が、出て、帰ろうと言つて、もう、この汽車に乗せていっても、助かる見込みはない、と言つて、連れて帰りました。連れて帰つても、家もあります。ずっと長い間、掘立小屋みたいなので野宿生活でした。

そして八月十五日です。わたしたちが仮小屋をつくっている近くを通りかかったおじさんにわたしは聞きました。「戦争は終わったんです。もう負けたんです」と言われました。「戦争は終わったんです」と聞いたときのわたし、十二歳のわたし、すっかり覚えております。「助かるんだ。兄弟は一人ずつ死んでいく。でも助かるんだ」と思つて、わたしは知つておりました。戦争が終わつて、わたしはもう殺されなくてもいいんだ。沖繩の次に今度は、長崎、鹿児島

島 千葉のどこかに上陸してくるんだということを聞いておりました。でも戦争が終わったら、わたしたちはもうアメリカ兵から殺されなくてもいいんだ。上陸してきても殺されなくてもいいんだ。わたしはそう思って、いま生き残ってる父、母、兄弟は助かるんだ、殺されなくてもいいんだと思っておりました。その夜、時間はわからないんですが、一番小さい弟、腰が家の柱に挟まって、抜けなかつたんだそうです。周囲の家がだんだん燃えて近寄ってくるから、姉ちゃんが一生懸命に、この四歳の弟を助けようと思つて引つ張り出すんですが、取れなくて、もう火が燃えだしてきたので、大変だと思つておりましたら、少し元気な人が通りかかつて、助けてくれたからよかつた。原爆が落ちてすぐには、逃げていく人たちもけがをしたりして手助けできなかったそうです。時間がずいぶんたつてから通りかかつた、少し元気なおじさんに助けてもらつた、と言つておりました。

三郎 十六日に火葬したんです。そのときにわたしは父から頼まれて、十二歳で一人で火葬したんです。真つ黒焦げの妹を父と二人で火葬した要領で、火葬してきてくれないかと言われて、畳のござに四歳の弟を包んで、抱いて連れて行きました。真つ黒焦げの妹を父と火葬した同じ場所に連れて行つて、はじめは小さな木々を拾い集めていくんです。そして、少しずつ大きな木切れをその上に乗せて、最後には家の柱がたぐさんそこに積まれておりました。その上に、畳のござにくるんで抱いて連れてきた、一番小さい四歳の三郎を載せて、下からマツチで火をつけました。火はすぐに燃え上がりました。弟は真つ赤な火のなかに燃えていっています。ちやうどそのとき、西のほうから夕陽が照ってきます。そして弟が燃える真つ赤な火がどんどん燃え上がつていきました。弟は燃えていくとき、肘とひざに、びしびしと音を立てるんです。わたしはその前に座つて、泣きながら手を合わせて、弟に「さよなら、さよなら」とそこに座つておきますと、涙がこぼれ落ちました。この涙も、弟が燃える火と、真つ赤な夕陽とが赤く染めたのを覚えております。わたしは最後に弟に言いました。「戦争の日しか生きることができなかったねえ。」この弟は、生まれたのが真珠湾攻撃のあの夜です。そして死んだのが、戦争が終わつた日です。ですから、最後に弟に言ったことは、

「平和な日を一日も生きることができなかったねえ。」そう言いながらわたしは、兄弟を集めている掘立小屋のほうに戻っていきました。

弟はお菓子を食べたこともない、遊ぶこともあまりありませんでした。とうとう戦争の日しか生きられなかったんです。わたしは泣きながら言った言葉覚えております。「戦争とはこんなにもむいものか。」

そしてその翌日は、今度は十歳になる弟、陽恵（ようじ）が死にました。そのまた翌日は妹が死にました。毎日のように死んでいくんです。とうとう十四歳の姉ちゃん一人になりました。わたしはこの姉ちゃんだけはほかの兄弟よりも少し元気そうだったから、助かるだろうと思っておりましたが、原爆が落ちて十日たった十九日、このときに父と母が食べ物をもらいに行つて、掘立小屋には姉ちゃんとわたしが二人おりました。十日たったときにわたしの目の前を動くものが飛んでいきました。今度の新型爆弾は、原爆という言葉じゃなくて新型爆弾と言っておりましたが、みんなを殺してしまつたんだ。燃え尽きてしまつて、すべてを殺してしまつて、動くものがいなくなつたんです。それなのに、その日、姉ちゃんと二人でいるときに、トンボが一匹、わたしの目の前を飛んでいったんです。わたしはその動いて飛んできたものを、しっかりと見たかつたんです。トンボを目で追いましたら、隣の池に突き刺さっている棒にとまりました。わたしは池に入つて、とまっているトンボにじつと近寄つていきました。そうしますと、真っ赤な赤とんぼが一匹だけでした。ここに動くものが来た。すべてのものが、人間も草も木も、生きているものがなんにもなくなつてしまつて、動くものがなんにもいなかったんです。それなのに、一匹のトンボがとんできたのが、十九日、十日たつてからです。

姉ちゃんも手伝つてくれるに違いない、少し元気だからと思つておりました。わたしがトンボを見つけると、姉ちゃんが呼びます。わたしは池からあがつて、姉ちゃんのそばに近寄つて「どうしましたか」と聞いたら、手と足がひどくしびれるから、擦つてくれないか、と言われました。わたしは、姉ちゃんだけは少し元気だから、「姉ちゃん、一

人生き残ってくださいよ。姉ちゃん一人でも兄弟が生き残ってくれば寂しくない」と言いながら、わたしは近寄って、擦ってあげました。ガラスが刺さったままでした。腕にガラスがざらざらと触れるんです。そしてそこが化膿しております。それだけじゃなくて、どす黒い血の塊みたいな斑点が体のあちこちから浮き出してるんです。近所のおじさんから、「今度の新型爆弾は悪いガスを出しているんだ。そして、黒い斑点が体に出てきたら死ぬんだ」と聞きました。あとでわかったんですが、その悪いガスというのが放射能だと思います。

姉ちゃんはわたしの目の前で、戦争勝っているのかと聞くんです。ラジオも新聞もないので、なにも知らないんです。戦争が終わったことを。そしてわたしは、聞かれたからと思つて、「うん」とうなずきました。立ち上がりまして、ふらふらつとして。両方の手を高く上げて、「天皇陛下万歳」と声を出して倒れてしまいました。わたしの目の前で死んでいってしまったんです。十日たつて、とうとう兄弟全部、死んでしまいました。姉ちゃんは、ここに大橋の兵器工場があつたときに、挺身隊として動員されてきていたんです。むかし正門といつていたほうに、「今日、お米の配給があつたら炊いて、お昼にお弁当を持ってきてあげるからね、姉ちゃん。正門のところに待つてください」と言つて、持つていきましたら、お昼、ちゃんと正門のところに待つておりました。姉ちゃんは喜んで弁当を受け取つて、また工場のなかへ消えていきました。姉ちゃんは兵器工場に女子挺身隊として働いていたので、いまでも池田寿子と名前が書いてあるのが向こうのほうに残つております。とうとう姉ちゃん、死んでいってしまったんです。原爆が落ちて、毎日のように次から次へ死んでいってしまったんです。

母の死―入院―被爆者農園

兄弟全部死んでしまつて、しばらくしてから父が目が見えなくなつて県庁を退職しました。十月から十一月にはもう県庁を辞めざるを得なくなつたんです。そして今度は、母が具合がよくなくて、十年たった六月九日に死にました。前の年の十二月くらいから寝たきりになっていました。目が見えない父を置いて、そして寝たきりの母も全然動けないので、寝かせたまます。そのころは原爆医療保護もないので、寝かせたまます、薬をかうお金もなくて、わたしはようやくご飯を炊くんですが、朝早く起きて、母のおむつを川へ洗濯に行き、そして帰つてきてからご飯を炊いて食べるんです。小さなおにぎりをたくさん作つて、朝昼食べる分をお皿の大きいのにのせてから、母の枕元の手の届くところにおいて、そして父と二人を家に置いて、仕事に行きます。釜でご飯を炊きますから、四十分くらいかかるんです。まきも自分で取つてこななければいけない、お金もない、たいへんでした。でもなんとかすることはしました。六月の九日。母は「兄弟がみんな死んでいったのはこの日だ」と言つて、九日の日はいつも、あまりなにもしないでおりましたが、寝込んでしまつてから九日が来たんです。六月九日。どうも危ないなと思つていたら、朝から母はわたしのベルトを握つて離さないんです。今日は原爆が落ちた日だから、兄弟が死んだ日だから、家にいてくれないか、仕事に行かないでくれないか、と言われたんですが、どうしても休むことができなかったので、振り切つていきました。そして、「少し早く帰つてくるから待つてくたさいよ」と言つて、仕事に行きましたが、四時ごろに、「お母さんが亡くなったから早く帰つてきてくたさい」という連絡が入りました。

帰つてきたら父が、「お母さんは一日中、お前のことばかり言つて待つていたよ。まだ見込みがあるかもしれないから、お母さんのお布団に入つてごらん」というので、わたしは母の布団に入つてみたら、また母のぬくもりが残つておりました。そのときが一番悲しかったです。兄弟が前に死んでしまつて、母が死にました。そして、それだけじゃないんです。今度は、目が見えない父だけを置いて、県庁に働きに出ます。そうしますと、みんなが、寂しいだろうということ、掘立小屋にお菓子を持つて来たり、遊びに来たりしてくれていました。父は楽しいと言つておりま

したが、そうこうしているうちに、今度はわたしが、看病疲れというか、病氣しました。その病氣は、いま耳が聞こえないと言いましたように、耳が急に聞こえなくなつて、歩けないんです。わたしは病院に行こうと思つて、歩き出しました。でもふらふらしながら、歩けないんです。

そしたら、夜間高校の英語の先生にありました。この先生は「耳が聞こえなくてふらふらするんだつたら、普通の病氣じゃないから、大病院の耳鼻科に自分の友達がいるから、そこに行つてちゃんと診察してもらいなさい。小さな病院にいたつてだめよ、あなた原爆にあつてるんだから」と言われ、大病院に行きました。そしたらすぐに手術をしなければだめですと言われ、手術をしました。そうこうしているうちに母の一周忌が来たんです。ちょうど入院して、手術後のまだ動けないときでした。わたしは食べ物を、病院食じゃなくて、弁当を友達に持つてきてもらうことにしようと思つて看護師さんに言いました。看護師さんがわたしにいろいろ聞くんです。「どうして病院食を食べべないんですか」と聞くから、「じつは母の一周忌が来たんです。原爆で寝たきりになつて死んでいったんです」と言つたんです。そしたら、「いいですよ」と言つて、それから、「兄弟はだれもいないんですか」とか「お父さんは目が見えないんですかどうしてんですか」とかいろいろ話しているうちに、親しくなつて結婚したのが、いまの家内です。そして子どもが二人生まれて、いま孫が二人います。娘は東京のほうに就職しておりましたが、長崎に旦那を連れて戻つてきました。

わたしは被爆者農園をつくらうと思つたんですけど、つくる前に資本やらだけを借りて、県職員で、病氣をして仕事に復帰できない人がたくさんおられたんです。調べたら十人、十五人ぐらいおられるんです。その人たちをすぐに職場に戻すということは精神的な問題なんかで、なかなかできないもんですから、県庁の組合とお話をして、そういう人たちを農園で、なんとか半年ぐらい、体をつかいながら精神的なものを治すことをしようかねえつてことで、土地を借りたんです。ところが、それが行政だかなんか難しくて、できなかったんです。わたしはそれが一番いいと

思つて畑を買つたんですけれど、それが被爆者農園ということになって、被爆者三人だけでしていたときには、一橋大学の生徒さんたちが夏休みに来て、何日もキャンプを張ったりしていたこともありました。

どうもありがとうございます。時間が来てしまいましたので、このへんでちょっとだけ質問をお受けしたいと思います。ですが、わたしは原爆で耳が一方聞こえなくなっておりますので、大きな声で手を挙げて聞いてください。

質疑応答

——お話のなかで被爆時、アメリカが憎いと感じたとありましたが、いまはアメリカに対してどのように感じていらっしゃいますか。

池田 「平和への誓い」をわたしは述べたことがありますが、その中には文章として書いております。でも、ニューヨークに二年前行つたときには、公の学校にはわたしたち被爆者が話をする許可が下りずに、有名な一貫教育の高校に二三校行きましたが、そこでは、ちゃんとアメリカが憎いと言いました。それと、ある学校から、「アメリカの人が来てる前でアメリカが憎いと言われたけど、そんなに憎いんですか」と言われたから、「そのときは憎いと思つていましたけど、いまはそんなふうには思つていませんよ」と言いました。やはり、そのときには「アメリカが憎い」と思つておりました。いまはそういうことではいかなんだと思つておりますが、もつと詳しく言つと、「原爆が憎い」と言つたと思つてください。それで勘弁してください。

——日本政府に対して、当時どのように思っていたらっしゃいましたか。

池田 戦争が始まったときあたりから、ずっと親たちから、戦争する相手が憎いんだとばかり言われていました。でも「戦争が終わったんだ」とおじさんから聞いたときに、沖繩が艦砲射撃を受けて、たくさんの人たちが壕の中に逃げ込んでいたのを、アメリカ兵が上陸してきて、そして炎放射器でみんな焼き殺してしまっただけ、というのを実際に沖繩に行つて見たり聞いたりして思つたんですけど、やっぱり戦争とはこんなにも憎いんだ。だからわたしは「戦争が憎い」というのが本当だと思います。そしてアメリカ兵が長崎にもすぐに上陸してきました。わたしたちが掘立小屋に入っていたところですから、九月の終わりごろに一番早いアメリカ兵が来たと思います。畑のなかをジープが走つてきて、父が原爆でみんな死んだんだとそのアメリカ兵に言いながら、写真を撮ってもらつたのがいまだに見つからないんです。一生懸命探しておりますが、アメリカと日本を行ったり来たりして。わたしはそのころからは、アメリカ兵は人間を本当に殺すんだとは思いませんでした。あとは、たばこをもらつたりして、それから仲良くなったのも覚えております。

——お姉さんは何歳ぐらいから挺身隊として働いていたのですか。

池田 いまの中学の三年生のときにはもう工場で働いていました。ですから、いまの中学二年で、女学校の高等科は修了になるんです。

——池田さんの証言を始められたのが一九八一年と書いてありますが、それはどういふきっかけではじめられたので

すか。

池田 一橋大学の社会学部が、わたしたち青年乙女の会という被爆者のグループに聞き取り調査をしに来られたんです。そのなかで、話すことができるようになったんじゃないかと思えます。というのは、わたしたちは学校にほとんど行っておりませんし、勉強もできませんでしたが、一橋の学生さんがテープに録られて、ずっとそれを整理しながら記録されておりますので、それが原爆の話をするきっかけになったんだと思います。自然とだんだん話すようになりました。そういうことで一度にじゃなくて、徐々にわたしたち被爆者の記録をとっておかなければいけないということで、話を聞かせてもらえないだろうかというところから始まったんだらうと思います。

〔追記〕 なお、本稿は2012年5月15日に行われた平和講座の講話内容をテキストに起こしたものである。